校長室より　　第６５号

「天空高き」

平成２６年１１月７日

修学旅行の移り変わり－F2 関東・S1 豪州旅行を終えて－

　小学、中学、高校時代、それぞれの時代の中で、一番の楽しい思い出は、と聞かれたら、やはり修学旅行でしょうか。

　本校は明治３１年（１８９８年）に創立、今年で１１８年になりますが、一体いつ頃から修学旅行が始まったのでしょうか。

　大正４年発行の会誌「高水」第９号に学友会費決算報告（大正３年度における収支決算書）、収入の部　修学旅行費補助７円、という掲載がありました。ということは、大正時代の初期にはすでに修学旅行に行っていたということです。

　ではどこに行っていたのでしょうか。

　会誌「高水」２３号（大正５年）に、１０月１日島田駅（山陽本線）に８０名が集合し、柳井港駅で降り、宮本浜飛行場でプロペラ機「剣号」の飛行（約１７分）を見学した、とありました。当時は、国産のプロペラ飛行機が開発された時期でもあり、宮本浜飛行場には数万の観客が来場したそうです。

　翌年の大正６年には、第２，３学年５０名が５月２０日～２１日、１泊２日で広島市と厳島に修学旅行に行ったという記事が、会誌３１号にありました。その旅行日記の最後には、「初旅の　五十の心の　世ゆきし　連絡船は　うれしかりけり」という短歌で締めくくられていました。

　当時、ほとんどの生徒にとって旅行するということは初めてだと思われます。

いつか来る日のために備えた人だけにチャンスは訪れる

仲里　清（前九州共立大学野球部監督）

見るもの、食べるものを含め、すべてのことが初めて尽くしの体験であったと、想像されます。それだけに強烈な思い出として生涯にわたって記憶に残ったものと思われます。そして、今もその良き伝統として修学旅行は現代まで引き継がれているのではないでしょうか。

「百聞は一見に如（し）かず」（To see is to believe.）という諺があります。やはり、自分の目で見たり聴いたり触れたりしたもの（五感を通して体験したもの）は、一生私たちの脳裏に鮮明な記憶となって残りますね。

続けることの大切さ－ある朝の光景よりその１－

朝７時過ぎに学校に到着します。すでに教室で静かに自習をしている生徒達がいます。体育館やグラウンドでは運動部の生徒達が、早朝トレーニングで汗を流しています。そのような姿を目にすると、「頑張っているな」と感心すると同時に、「頑張れよ」と思わず声援を送りたくなります。

「早寝、早起き、朝ご飯」のスローガンを掲げた運動が全国で展開されています。

皆さんが健やかに成長していくためには、適切な運動、調和のとれた食事、十分な休養と睡眠が大切です。

子ども時代に、こうした基本的生活習慣を身に付けていくことで、学習意欲や体力、気力が向上し、充実した生活を送ることができます。そして、朝のさわやかな時間での読書や自主学習は、確かな学力の向上に大いに貢献する、というデータも出ています。

ある本の中で、アメリカの大リーグで活躍しているイチロー選手はこんな話をしています。

『ある時、イチロー選手にこんな質問をしたことがあった。「いままでに、これだけはやったな、と言える練習はある？」彼の答えはこうだった。「僕は高校生活の３年間、１日にたった１０分ですが、寝る前に必ず素振りをしました。その１０分の素振りを１年３６５日、３年間続けました。これが誰よりもやった練習です」・・・（中略）・・私はこれこそが、彼の最大の力になっている源ではないかと思う。』

第２回鍵かけコンテスト－ある朝の光景よりその２－

１０月２８日に第２回鍵かけコンテストがありました。前回（９月１７日）と比較すると、中学校では３１台中２９台に施錠がありました。（前回は３２台中２９台）。高校では３０２台中２４４台でした。（前回は２８０台中２１１台）。施錠率を比較す

ると、中学で９０．６%から９３．５%。高校で、７５．４%から８０．８%と、いずれも前回よりも向上していました。しかし、まだどちらも施錠率１００%を達成していません。一人ひとりの毎日のちょっとした心がけで、盗難を防止することができます。意識しなくても、無意識のうちに鍵をかける習慣を身に付けたいものです。

本当に大切なものは目に見えない

　フランスの作家サン＝テグジュペリの言葉です。彼の代表作である『星の王子さま』には、「本当に大切なものは目に見えない」という有名な言葉が出てきます。

　思いやり、感謝、感動、癒し、夢、希望など、この世には目には見えないけれども存在する大切なものがたくさんあります

　見えないものを形にして、目に見えるようにすることは可能なことでしょうか。

　見えないものを形にするものとして、日本古来の茶道や華道などの芸道。剣道や柔道などの武道が挙げられると思います。また、広い意味での芸術や芸能もそうだと思います。

　それらは、「こころ」を「かたち」にする、一種のテクノロジー（技術工芸）かもしれません。

　私たちの日常生活においても、見えないものを形にしているものがあります。それは、あいさつ、おじぎ、しぐさ、笑顔、といったものです。私たちが普段から心がけているこれらのものこそ、本当に大切なものを相手に目に見える形で伝えています。

　あいさつでもおじぎでも、マニュアルがあります。マニュアルに書かれたことを繰り返し行い、徹底してゆくことで、それらが自然に振る舞えるようになります。

　それらが無意識に振る舞えるレベルにまで達したときに、「相手に見えない大切なもの」を感じてもらえるのではないでしょうか。

木村陽子の

社会保障

千夜一夜

28

言葉はごちそう

K子さんの母は数年前に91歳で亡くなった。夫亡き後の8年間、最期の日まで郡部の町にある自宅で一人暮らしを続けていた。料理や掃除洗濯だけではなく畑で野菜を育て、家屋の改築も仕切っていた。膝が悪く持病もあったため、月に1度は50分近くバスにゆられてT市にある県立病院に通っていた。

「1日でも長く自宅で暮らしたい。だからできることは何でも自分でする」それがK子さんの母の信条だった。K子さんの気丈な母が顔をほころばせながら「あの時は本当に嬉しかった」と、K子さんに何度も語って聞かせたエピソードが2つある。

その一つは、K子さんの母が県立病院での診察を終え、バス停のある駅前の方に歩いていた時のことだった。後ろからゆっくり走ってきた軽自動車がK子さんの母の横で突然止まり、運転席の窓から見知らぬ中年女性が顔を出した。「おばあちゃん、駅まで行くの？ わたし、おばあちゃんを駅まで送ってあげたいけど、急ぎの用があってできないの。くれぐれも気をつけていらしてくださいね」その女性は笑顔で会釈をして走り去った。

あと一つは、地震が起きた時のことである。明け方近くに震度5弱の地震がおき、K子さんの母は家の大黒柱にすがりついて耐えた。地震の直後、隣の中年夫婦が大丈夫かと見舞いに来て言った。「おばあちゃん、逃げる時は一緒だよ」

「年寄りには言葉がご馳走」とK子さんの母は常々言っていた。「たとえ実際に行動にうつすことが難しいことであっても、そうしてあげたいという温かい誠実な思いを自分に寄せてくれるだけでありがたい。そのお気持ちだけで私は十分幸せです」ということなのだろう。それがK子さんの母の晩年の心持だった。

地方の市に住むK子さんは、荷物を手にして歩いている高齢者をみかけたらいたわりの言葉をかけ、車で最寄りの場所まで送ってあげることもあるそうだ。「母の言葉を思い出すから」と言う。

言葉には、万物を創造する力がある。言葉は魔法の杖なのだ。人は、魔法の杖を使って、どんな人生を創ることもできる。　池田昌子「言葉の力」より

二十四節気ー『立冬』11月7日頃この日から立春の前日までが、暦の上での冬です。日脚も短くなり、冬の気配も感じられるようになって、「冬立つ」ともいいます。近畿・関東では木枯らしが吹き出す頃です。